

## Noism1

### 実験舞踊 vol.1『R.O.O.M.』

Random = 無作為 Organ = 器官 Oriented = 志向 Monster = 怪物

“純粹なる動き。それは物語や意図を表現してはいない。ひたすら不気味に、“ただの生命”として蠢く身体。  
それは何らかのアイデアを身に纏い・・・”

#### 【企画趣旨】

Noism では今までに見世物小屋、劇的舞踊、そして近代童話劇と3つのシリーズを立ち上げてきた。見世物小屋は3部作で完結し、劇的舞踊は vol. 4 に達し、近代童話劇に至っては未だ2作品しか創作していない。要するにシリーズ立ち上げにはこれといったルールもなければ法則もないということだ。そして次は実験舞踊である。このシリーズがどこまで続き、Noism に何をもたらすかは分からない。そう、結果が分からないからこそ実験なのだ。

あらゆる作品が作者の思惑を超えた表現を含有すること。言い換えれば意図せぬ表現として受容されることを考慮すれば、舞台芸術はその本質において実験的であるといえる。しかし本シリーズで敢えて“実験”の二文字を掲げるのは、その実験が作者である私自身にとつての実験であるからに他ならない。音楽や物語など、私にとっては外部の既存のものから得る刺激によって創作するのではなく、まずは空間及び動きの法則を仮定し、そこから何が生まれるのかを、創作過程において研究／記録すること。その科学的アプローチこそが本創作（実験）の趣旨である。

こうした実験を“今”することには2つの狙いがある。1つにはNoismの身体性を表現する作品として、13年経った今も世界で上演されているNoism代表作NINAに代わる作品を創作すること。そしてもう1つの狙いは、新たに始まる15thシーズンにおいて、意図せずして国際化することになった新生Noismの、国際的身体（普遍的身体）に通用し得る独自の訓練法の開発、すなわちNoismメソッドのバージョン・アップを図ることである。

#### 【制約＝箱】

舞台を箱（ROOM）化すること。通常の劇場空間では床面と舞台背景のバック・ドロップ以外に壁はない。舞台両サイドには演者が出たり捌けたりする舞台袖と呼ばれるものがあり、天井には照明機材が無数に吊るされている。しかし本作では舞台両サイド及び天井にも壁を設けることにより、舞台空間をまるで化学で用いるシャーレのように箱（ROOM）化する。これはスタジオサイズの小劇場作品だからできることでもある。

#### 【法則＝反復】

舞踊家にある法則（動き）を与え、その同じ法則（動き）を次の舞踊家が反復する。しかし前者が踊り終わる前に後者が踊り出すことにより、箱内で二人の舞踊家は衝突することになる。そこで偶然性によって舞踊家たちが生み出す関係性を抽出すること。それはある表現のために関係性を恣意的に与えることではなく、あくまでも実験の成果として生み出された関係性から、創作を展開／飛躍させていくということである。

#### 【ドッベルゲンガー】

自己像幻視には二重化、分割、交換、回帰といった要素が含まれる。同じ容貌、同じ行動、同じ運命が反復する世界。これは何もSF内の仮想世界の物語（虚構）ではなく、クローニングに代表される現代科学が実現し得る、現実世界の物語（虚構）である。このような時代を生きる身体表現集団として、物語を語ろうとするのではなく、立ち現れる物語を記述すること。あるいは新たな物語創発の為に身を捧げること。それも我が国で未だ唯一の劇場専属舞踊団であるNoismの存在価値であると思う。

\* 創作参考資料 ジークムント・フロイト「不気味なもの」

金森 穰

りゅーとびあ舞踊部門芸術監督／Noism 芸術監督

（2019年1月初演時より）